

JAMの主張

技術の進歩と働き方

人材育成と技能の伝承が重要

機関紙 J A M 2017 年 5 月 25 日 発行 第 220 号

2017 年 5 月 27 日、川崎市で J A M は「ものづくりシンポジウム」を開催した。主な議題は、I C T や I o T、A I などに代表される技術の進歩と働き方。今後我われの職場でもその技術革新に基づく職場環境や働き方が変化してくると考えられる。しかし、具体的な姿は不透明であり、さまざまな思惑の中でスタートしたばかりである。J A M としては、技術革新の動向に注視しながら、将来に向け何が必要なのか、何を準備すべきなのかの議論をスタートさせる。

特に人材教育の課題は大きい。技術革新による変化に対応できる人材の育成もさることながら、技能を中心としたアナログとデジタルを融合し、いかに伝承していくのが重要と考える。これまでは、職人の目・耳・手触りによる感覚を「匠の<RUBY CHAR="技", "わざ">」として伝えてきたものが、デジタル化による数値や画像により伝承できる仕組みも生まれるであろう。一方、すべてがデジタル化に置き換わるわけではない。特に中小企業では、設備投資との比較において、人的な効率を求めた方がコストダウンできる生産も考えられる。したがって、我われには、いかに雇用を確保し、より効率的に生産性を高めるための働き方やスキルが問われる。

先日、インダストリアル・グローバルユニオンの仲間である「フィンランド専門職・管理職組合労連」の労使が J A M を訪問し、意見交換を行った。その中で「少子化と人材不足による技術・技能の伝承の問題」を質問すると、フィンランドでも日本同様、大きな課題との認識であった。労組としては「経営者の技能伝承や教育への意識が低く、一定年齢に達すると退職を促し、若手を採用しようとする」と発言し、一方経営側からは「年齢による退職ではなく、スキルの問題である」とその場での反論もあり、興味深かった。この第四次産業革命といわれるデジタル化は日本だけの問題ではなく、今後先進国を中心に、多くの国で抱える変革への対応である。

とはいえ、今後も「ものづくりは人づくり」に変わりはなく、魅力あるものづくり産業・企業をつくるために何が必要なのか、を考えるスタートにしたい。

副会長 藤川慎一